

## 階段のある園舎と子ども

黒田成子

「せんせい、こんどのようちえんは光っているよ！」

これは五年前の秋、改築された新しいわが園舎に子どもたちが初めて入ってきた時の歓声だった。旧園舎は小じんまりとした木造の建物で、それなりの良さはあった。しかし、四十五年の古さで破損している所もかなりあったから、それにくらべ新園舎は子どもの目にたしかに輝いてみえたのだろう。特に目をひくような明るい色

彩があったわけではなく、むしろ白一色の平凡な、鉄筋の建て物であった。それを「光っている……」と叫んだ子どものことばに私たちも思わず共感したのをおぼえている。

### 自由な生活の場として

設計をして下さった吉岡亮介氏は現場の私達と何度も

話し合って下さった。私達は堅い壁などでしきられた狭い保育室でなく、子どもたちが自由に生活の場をくりひろげていかれるようなオープン形の形態を夢見ていた。日常の保育のありさまをあれこれ話すとY氏はじっと聴いていて「それでは二階にしようでしよう」と提案。

園全体の敷地面積がわずか一四〇坪しかない所でそのよゆうな遊び中心の保育を期待するなら一階だけではスペースがあまりにも不足のようであった。

二階説には先生方は皆賛成だったが、反対したのは園長の私人。穏やかなY氏に「どうして二階では適当でないのでしょうか」と尋ねられても「子どもがすぐ庭に出られないから」「眼がとどかない」「あぶないから」位の理由しかあげられなかった。

よく考えてみると三十年前に学び、当時は新説としてとびつき、今だに自分の中にしっかりと巣くっている固定概念——園舎はこういうものだというものがじやまを置いていたらしい。私は子どもたちの姿をそこにおいて思いめぐらしてみた。そしてよく考えたすえ、二階でもい

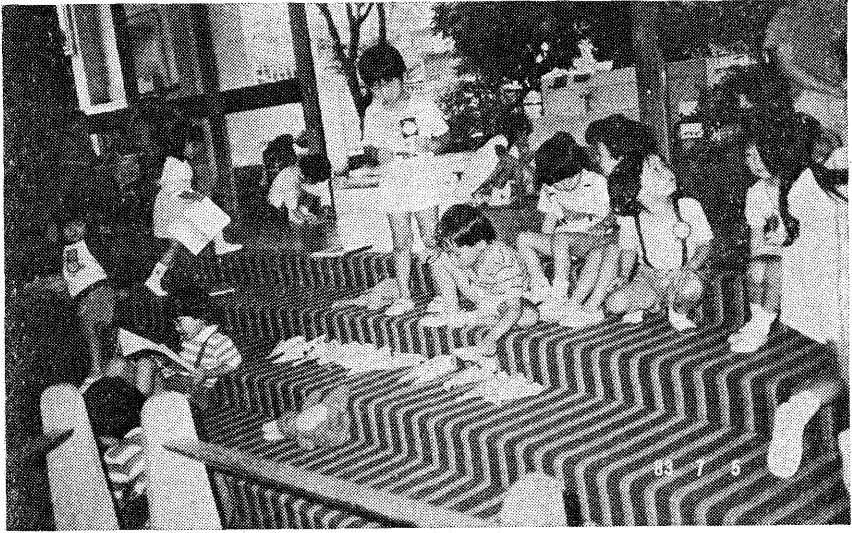
いではないかという結論に達した。子どもたちは昔の子どもではなく今の子どもだ。生活の仕方も変っている。むしろあがり下りはたのしいかもしれない。そこでいきいきとした遊びも出てくるかもしれないと思ったわけである。そしてようやく発想の転換をする事ができた。

その後も何度か設計図が画きかえられ、種々な問題をのりこえ、落成となったのである。この五年間、子どもたちは保育日の朝は走って飛びこんでくる。そして文字通り喜々としてこの小さい園舎を自分たちの生活のすまいとして日々を生きている。

### じゅうたん階段

二階に通じる階段のことはさておき、一階のホールの入口に「じゅうたんかいだん」と言っているところがあるが、子どもたちはここで遊ぶのが大好きである。

これは外から入ってきた所にホールの幅いっぱいひろがっているカーブしたステップのことである。わずかに四段位のステップだが、軟い栗色と茶色の縞のじゅうた



んが敷いてあるところから「じゅうたん階段」と言われるようになった。

もともとこのホールの床に段差がついたのは建築基準法により、北側斜線の制度があった日照権の事のためと、七メートル五十センチの高さ制限をクリヤーするために、ホールの床を約七十センチほど下げなければならぬことから、やむなく実施したものであった。設計者がこれを積極的に利用して保育の面で生かせるものとなった。

じゅうたん階段と言えば入園間もなく、此処で皆の遊びをじっと見ていたN子の事が思い出される。ある日のこと、先生がやさしく誘いかけて、やっとN子は遊びに入ったように見えた。しかし、しばらくすると、いつの間にか彼女は又じゅうたん階段の隅のところへもどっていた。そして降園時までずっとここに坐っていた。N子が自から「入れて」と小さい声で言えるようになるまで何週間もかかったが、じゅうたん階段の隅っこはN子にとっては又とない安住の場所だった。

ある時は子どもたちがままごとをするため道具をせつせつともってきたり、ふとんを運んできたったりした。階段の段差をつかってお家ごっこが始まる。それは平板な床や畳の上とは又異った感触。そして一段と複雑で面白いものになったりした。

朝のゆっくりとした自由な遊びが終ると子ども達はマラソンに行く。マラソンといっても近所の小学校を一回り走ってくる程度のことである。その時、子どもたちはぬいだ上着や下着をじゅうたん階段のところへたたんでおいておく。五〇〇メートル余りの短いコースだが先になり、後になりして走りながら、息をはずませ、上気した顔で戻ってくる。じゅうたん階段は次々に花が咲いたように賑かになり、子どもたちの熱気が溢れる。時にはパンツまで脱いでしまった四歳児が、「どっちがおもてなの——？」と困っていると五歳の女児が、「どれ、見てあげる」と手に取り、真剣なまなざしでしらべたりする、ほゝえましい光景も見られる。(写真は子どもたちが並んで紙飛行機をとばしている所)

## 遊び場としての階段

次に一階から二階へあがる階段のことを記したいと思う。従来私は階段といえ一階と二階を結ぶ通路位にしか思っていなかった。わが園舎のホールの両側にある階段には木製のすべり台がはめこんであり、子どもたちは階段を駆け上がったたり、滑り下りたりをくり返すことのできる大好きな活動の場となった。階段はホールを見下す展望台ともなる。又子どもたちは、階段の途中から長いひもを垂らし、一階でつくった魚をつりあげて遊んだり、実に面白い遊びを創り出している。

新築後間もない保護者会の時、母親につれられて来園した二歳未満の女児が、いつの間にか階段の半ばまで登っていて驚いた事があった。それほど、この階段は単に傾斜がゆるいだけでなく、段の高さが殊に低く、又段のふみづらがかかり広くしてあり、小さい子どもでも段の途中で坐り込んで遊べるほどのゆとりがあった。

三学期の事であった。年長組では独楽をまわせる子ど

もは三十九名中、四、六名にすぎなかった。それがまわせる人の輪がひろがり、ついにクラスの「独楽まわし大会」をする事となった。年長組のK先生の日誌にはこのように記されている。

へ……このこま大会は個人戦からグループで何人まわせるかというものになっていった。今まで「わたしはまわせない」「まわさない」と言っていた子どもたちも友だちに手とり、足とり教えられ、とうとうまわせるようになった子どもが何人もいた。自分がまわせるようになるのと次の友だちに教えるという輪がひろがっていった。仲間同志で励まし合い、互に「出来た！」と喜び合う姿は何か立派に見えた。特に子どもが教えてあげたりすると、まわった時にはまわせた子どもも、教えた子どもも共にはしゃいで喜んでいた。

独楽まわしはただまわすだけでなく、階段をおろしたり、すべり台ですべらせたり、ものの上で廻したり、手にのせたり、ケープルカーをしたりと色々なやり方を変えてたのしんだ。……

三学期後半の階段はまわしながらこまを下してくる子どもや、グループで組んで遊ぶ子ども等で満員の盛況を見せていた。気がついてみると年長組の三学期の目標「じっくりとりくめるようになる」はいつのまにか一人一人のペースで身についていた。

### 園舎の住人として

はじめあんなに「二階」に反対だった私は共に働く先生方や、冒険好きの子やそれぞれの個性をもつ子ども達と楽しく暮しながらいつしか保育を水平的思考から立体的思考へと転換する事を学んでいたのである。紙上では園舎の一部しか紹介できなかったが、ここで生きる子どもも、保育者も、家庭の人たちも皆共に自分なりの自立を見出し、そしてたくましくこの住まいをフルに生かして育ち合っていると思っほしいと思っほしい此の頃である。

(武蔵野相愛幼稚園)